

中国における「知られざる祈り」

三宅康之

筆者は中国政治外交問題の研究者として、日々、さまざまな中国情報に目配りし、中国理解を深めようと尽力しているつもりである。中国での宗教問題についても自然と見聞きするが、そのたびに、小稿タイトルの「知られざる祈り」というフレーズが筆者の脳裏に浮かびあがる（もともとは中国の少数民族に関する著作のタイトルに由来する）。

以下では、宗教をアヘンとして否定するマルクス＝レーニン主義に依拠する中国共産党一党支配体制の下で存在する、さまざまな「知られざる祈り」について、この場を借りて整理、紹介してみたい。

ひとつは、少数民族の宗教問題である。チベット族とウイグル族については比較的知られている。チベット人居住地域（現存のチベット自治区に限定されないことに注意されたい）では、昨年来、チベット仏教僧侶・尼僧の焼身自殺が断続的に発生している。ニュースに接するたびに胸がかきむしられる思いである。

イスラム教徒であるウイグル族についても、問題は深刻である。異教徒の漢民族による統治を好まない人々の一部は過激化し、中国当局からはテロリストと認定され、駆り立てられている。

いずれも漢民族の移住者の増加に伴う摩擦の増大から反発が生じているようである。事件が起きぬよう厳戒態勢を敷くと、より大きな内外の反発を生むという悪循環に陥っているが、当局も方針転換できないため、抜け出すことができないでいる。

漢民族の側にも「知られざる祈り」は存在する。キリスト教について触れると、クリスチャン人口は増加中で、政府の「宗教藍書」（2010年）は約2300万人と発表した。しかしこの数値は当局の許認可を得た教会に属する信徒数であり、当局の許認可を得ていない「地下教会」も多数存在するのであって、推定によっては信徒数は1億人を超えるともいう（一部では新興宗教化しているようである）。

こうした問題に関する最新の参考文献としては加茂具樹等編著『党国体制の現在』（慶応義塾大学出版会、2012年）があり、関心のある向きはこちらを参照されたい。とまれ、少数民族を含めた中国13億人の人々が精神的に満たされ、宗教問題で殉教者や被害者が少しでも早くなくなることを切に願ってやまない。

（国際学部教授）